

---

# 旅人

T o s h i k i

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

旅人

### 【Nコード】

N7463B

### 【作者名】

T o s h i k i

### 【あらすじ】

第一話は旅人と釣り人の淡々と会話がされる話です。第二話は一話目とは違い淡々とはしてません。血生臭い表現や暴力的な表現があります。第三話ストーリー急展開？

## 第一話 旅人と釣り人

旅人は河原にさしかかった。日が落ちる前に野宿の準備をしなければならぬ。河原は丁度良かった。

ふと私の目には先客の姿が映った。川にかかった小さな橋に腰かけ、釣り糸をたらししていた。しかし足元のバケツには透明の水があるだけだ。

「釣れますか？」

お決まりの言葉をかけてみる。釣り人はこちらに顔をむけ、首を振った。

「残念ながら」

同じような年頃の青年は河原の方へ腕を伸ばした。そこには深緑の小さなテントがあった。

「旅人さん。もし良かったら僕のテントで休んでいきませんか？」

「良いのですか？お邪魔しても」

願ってもない事だった。私はテントを持たずに旅をしていた。野宿となると火の側で寝袋にくるまり眠る。不自由は無かったが、それでもたまには屋根が恋しくなる。

たとえ布で出来た簡易的なモノであっても。それにかなりの時間、人に会っていないければ、孤独を愛する私でも人と話たくなる。

「遠慮なく。大した持て成しも出来ませんが」

「いいえ。ありがとうございます」

私は釣り人に微笑んだ。

釣人はテントに招いてくれた。近くに寄るとそれが旅人が使う携帯用のものだとわかった。小さく折りたたむ事が出来るが、けっして華奢ではなく丈夫な物だと。

「あなたも旅をしているのですか？」

「ええ、そうです」

釣人は竿を肩に担いだまま柔らかな笑みを見せた。その笑みが彼を見た目より年長に見せた。同じ年位だろうに一体何歳なのだろう？

テントの側には小さな釜戸が設えてあった。その中の灰の量や様子からしてこの釣人が数日前からここに居るのがわかった。

釣人はテントの中に入り、すぐに出てきた。その手には紙にくるまれた小さな包みを幾つか持っていた。それらを釜戸の側には置き、釜戸に火をおこし始めたので、私も手伝う。小山になった薪を空気が流れやすいように並べていく。

「ありがとうございます。さすがですね。手慣れている」

「まあ、5年も旅をしていれば、嫌でも身につきますからね」

「5年？それは素晴らしい。さぞかし色々な地へ行かれたのでしょうか？」

「ええ、まあ」

私達は旅の話をしながらてきた経験を喋り、彼は相づちをうち時々質問をしてくる。そんなふうだった。

彼は薫製肉とチーズ、そして乾パンを私に出してくれた。旅の下ではこれはまさしくご馳走だった。私は前の町で仕入れた薄切りにした乾燥果物を提供した。彼はとても喜んでくれた。

食事のあいだも私たちちの会話はとぎれはしなかった。私はベテランの旅人とはまだ言えないかもしれないが、それなりに沢山の経験をし、修羅場も乗り越えてきた。だから旅の話は自慢出来るものであったし、彼はどうみても私よりも経験が浅く見えた。だからできるだけ彼の役に立つような話をしてあげたくなった。

やがて夜も深まり、私は彼のテントで休ませてもらった。

翌朝私が目を覚ましたのは水音を聞いたからだった。まだ予定していたよりは半時間程早かったが、隣にいたはずの彼がいなかった。身支度を整えてテントを出た。彼は昨日と同じに橋の上に座り釣糸を垂れていた。

「おはようございます」

彼の側までいくと彼の方が先に挨拶をしてきた。私も挨拶をかせし橋の上に立った。彼の足元のバケツには、昨日とは違い今朝は岩魚が3匹泳いでいた。そして丁度いま、更に一匹釣り上がる。

彼は4匹の魚の入ったバケツをもち立ち上がった。

「少し早いです、朝ごはんにしましょう。塩で焼くと美味しいですよ」

「ありがとうございます」

先に行く釣人の背中を見つつふと、私は彼に疑問を持った。それ

は昨日テントに入れてもらってからなんとなく、引っかかっていた事が、疑問の形になったものだった。

私は彼の旅の仕方に疑問を持った。彼はどうも数日に渡ってここに居るようだ。少なくとも二、三日の滞在とは言えない様子を、テントの中に見つけた。

「あの変な事をお聞きしますが」

前置きをすると彼は笑みでもって応えた。

「あなたは昨日、旅人だと言っていましたね。なのにこの地には、長くいらっしやるようだ」

「ええ、その通りです。僕はここに……半年ほど居ますね」

「何故です？」

「何故とは？そんなに不思議ですか？」

「旅人の殆どは一所に長くはいません。長くても一月ほどではありませんか？私はそうですし、私が出会った旅人達も皆、そうだったでなければ旅人は旅人とは呼べない」

旅をしてこそその旅人が、長く一つの地に止まって居てはそれは旅ではないと私は考えていた。だから私はどの地に行っても、一週間以上留まる事はない。

旅人

出来るだけ沢山の地へ行きたい。沢山のものを見て知りたい。だから有効に時間を使いたい。私の言わんとすることは彼にも伝わったらしい。彼は少し首をかしげて、何か考えるような遠い目を

した。その目が不思議な色を見せた。老成を感じさせる目の光に、まさかと首をふる。

「あなたの考えは正しい。あなたはあなたの心に従って旅をしている。それはあなたの旅だからです。沢山の地へ行く事は素晴らしいし、そこから得るものもかけがえのないものでしょう。 ですが僕は、一つの地に深く関わっていたいのです。気に入ってしまったえばその地に住み、しばらくしてまた旅立ちたくなったら旅へ戻る。それが僕の旅なのです」

私は言葉を失った。ひどく自分の常識に囚われていた事に気付かされ、恥ずかしいおもいだったからだ。

一人ひとりの旅が、違っているなど当たり前なのに。

微笑んだ彼の目は春の陽のように優しく、そしてとても静かな深さを感じさせた。それはまるで賢者の瞳。

私は彼がなんとなく、姿とおりの歳ではない気がした。しかしそれならばなんなのかと聞かれれば、答えられない。年を取らない人間はいないのだから。

いや、もしかしたら存在しているのかもしれない。例えば目の前に。なぜならここは旅の空の下なのだから。

私は自分の中の、半分馬鹿ばかりの考えに笑い、半分納得して最後にもう一つ質問をした。

「今は旅立つ気にはならないのですか？」

私は彼の話はまだ聞きたかった。彼としばらく共にいてみたくな

ったのだ。もしまだこの地に居るのなら、私は私の主義を曲げてでも、留まりたいと思ってしまうていた。

そしてもし旅立つなら

彼はフツと一度目を伏せ、それから静かな声で告げた。

「僕は今日、南へ旅立ちます。そして気に入る場所が見つかるまでは、南下し続けるでしょう」

しつかりとした決意ある目と、声。

「僕はいつも行くべき所を自分では決めません。今回はこれで決めました」

傍らに置いていた釣竿を示す。

「旅立ちを決めてから毎日、夜明けと共に糸たらし、日暮までに魚が釣れば旅立とうと思っていました。昨日までは全く釣れなかった。でも今日は釣れました。だから旅立ちます」

「南へ？」

「僕は決めていましたから。あなたが起き、橋の上に来るまでに、釣れた魚の数が奇数なら北へ。偶数なら南へ行こうと」

「まるで今日は釣れるとわかっていたみたいですね」

本当にそんな気がした。そんな不思議さが自然と似合う男だから。

「今日まで魚が釣れなかったのは、あなたとこうして話をする運命をしめされていたのかもしれない。そして今日は、旅立ちを示された」

「それは……」

どういう意味だと聞きかけた私を、彼は指を口元で立てて止めた。

「僕は世界の声に従っているだけだよ」

私はいいよのない、捉えどころのない気持が胸に生まれたのを感じた。目の前にいる青年がとても不思議でとても大きなものに見えた。

優しく微笑んで送ってくれた青年は、私に一本の組紐をくれた。

優しく微笑んで送ってくれた青年は、私に一本の組紐をくれた。

彼が自らの袖を捲ると、そこには沢山の色とりどりの組紐がくくられていた。それは旅人がお守りにしている物で、旅先でもらったり、旅人同士が交換したりするものだ。

沢山の守り紐から青い物を彼はくれた。

「これからのあなたの旅が、良きものでありますように」

そう言って結んでくれた。青い中に銀系の混ざった組紐は太陽の光にキラリと輝いた。

旅人

昔話だが、一人の旅人が、旅の中で様々な事を学び続け、とうと

う知と道を知る旅人を守る神になったという。その旅人の髪は清水のような銀髪だった事から、守り紐には必ず銀糸を編み込むのがなましになっていた。

私はその昔話はお伽噺だと、はなから思っていたが、もしかしたら彼はそれに近づいている人のように思った。

彼の祝福の言葉は、私の中に暖かな力を与えてくれたからだ。

私は振り返ることなく、いつか再会を願って歩き出した。

若い旅人を見送る青年の側に、いつの間にかのっそりと大きな獣が現れていた。狼に似た白銀色の獣に気付き、自分の腿位の高さにあるその頭を撫でた。

「おはよう、一日ぶりだね」

にこやかに話しかける。すると獣は旅人の背を一瞥し鼻を鳴らした。

「ワシは人間は好かぬ」

獣はきちんと人の言葉を話した。

「おやおや、なら僕も嫌いなのかい？僕も一応は人間んだけどね」

「ふん。数百年も生きている魔法使いを人間とは言わぬよ」

やれやれと気難しい相棒の頭を、リズムをつけて叩いてから火の始末を始めた。

「やっとこの地を去る気になったかのう。魔法使い」

「僕はげんをかつぐほうだから」

「お主は人間くさいのう。いつまでも」

「だから、僕は人間なんだって。たとえ数百年生きていても お伽噺にかつがれていても」

肩を竦めてから登りゆく太陽を見つめた。変わる事なくあり続ける偉大なるものを。

あれに比べれば僕も小さきものなんだけどな。

終

## 第二話 黒き神（前書き）

一話とは違い普通の（？）ファンタジーです。

旅人

## 第二話 黒き神

ふと鼻に何か触った。うとうとしていた僕はそのくすぐったさに、おもわずくしゃみをした。

くしゃみで目が覚め、視界に入った緑の草の穂と、小さな手に僕は微笑んだ。

「やあ、こんにちは。チビスケ達」

草地に横になっていた僕を囲んで見下ろしている子供達は、声をかけると嬉しそうにはにかんだ。

僕は伸びをして起き上がり鼻をくすぐった草を手にし、指でもて遊んでだ。

「ナナスさあ、羊番してたんじゃなかったの？」

村一番のヤンチャ者で、小さい組の子供達のリーダーである少年が呆れた様子をみせた。

「ちゃんとやらないと村から追い出されちゃうよ」

髪を二つに結んだ女の子がにこにここと笑いかけた。

「うん分かってはいるけど、この陽気だろ？ついつい眠くなっちゃったんだ」

柔らかい日差しとさわやかな風。みずみずしい緑の草と、あちこちに色とりどりの花がが視界を埋めている。春の風景に気分はのんびりしてしまふ。

「ナナスの事、大人達は良く思っていないんだから」

「はは、そうだね。真面目にやるよ」

旅人

この小さな村に来たのは秋の終わり。ここのような閉塞的な村で、僕のような外者はあまり受け入れられない。それでも子供達は子供特有の好奇心で、旅人の話を聞きたがった。

だから子供達とは仲良しになったが、大人達は早く僕に旅立ってほしがっていた。

(悪い人たちじゃないんだけどね)

遠くに見える村の家々を見つめこっそり苦笑した。

集まっている子供達は羊番という仕事を僕に分けてくれた。僕が村に居やすいようにと。朝にこの放牧場に連れてきて夕方まで見ている。それが今の僕の仕事だった。子供達はほぼ毎日、お昼過ぎにやって来てはお喋りをしていく。

「キリーは今日もないの？」

仲良しの5人組。しかし最近は一人欠けていた。ヤンチャ君と同じ年の女の子はここ半月ほど見ていない。

「キリーは冬から調子が良くなかったんだ。冬に流行った病気にかかってから」

「だけどそれは治ったはずだよね？」

「うん。だけど元気ないんだ」

子供達はみな暗く沈んでしまった。

「ねえナナスは色んな所に行ったんでしょう？キリーを元気にする薬とか知らない？」

真剣な大きな瞳。4対の目に見つめられる中で、僕は肩をすくめた。

旅人

「ごめんね。僕は薬師でもお医者でもないから……病気の事は分か

らないんだ」

すまない気持ちで眉を下げると、元気者の少年は力いっぱい、僕の肩を叩いた。

「だよなあ。じゃなきゃいい大人が、こんな所でガキにでも出来る仕事をしてないよな」

「やあそれを言われると何も言えないなあ」  
頭をかきながら笑うと子供達の表情もなごんだ。

「もう少ししたらもつとあつたかくなるから、きっと大丈夫だよ」

「ナナスに言われても説得力ないよー」

子供達は声を上げて笑った。

夜遅く、日付が変わろうとする頃、僕は昼間は入らない村の中心へと歩いていった。夜中に村へ行くのは最近の日課となっていた。

『またかね』

静かな声が頭の中に響いた。僕は自分の影を見た。月明かりで出来た濃い影に微笑む。

「なんでもないならそれでいいんだけどね」

歩くのは止めず小声で答えた。

『あの栗毛の子供の事は放っておけ』

「そんな馬かなにかみたい……」

旅人

確かに目当ての少女は栗色の髪をしていた。

『おぬしが何を考えておるか知らぬが、おぬしは何も出来ぬ』  
姿無き声の主に僕は軽く頭を振った。

「大丈夫だよ。僕は君が思うより己を知っているから」  
『本当にそう願いたいものだ』

声の不機嫌にうめいたところで、目的の家についた。小さな木造の家はひっそりと眠りにについている。暗い窓はぼっかりと開いた、無感情な穴のようだ。

「おや？」

僕はその小さな家の屋根に在ってはならないモノを見つけた。

小さな黒い塊。

「やはり来たね」

『おぬし、先程己が言った言葉、忘れてはいまいな？』

僕が溜め息混じりに呟くと、姿無き声はさつきより強い口調で囁いた。

しかしそれは無視して、僕は屋根へと飛んだ。

音も無く屋根に降り立った僕に、ソレは驚きを見せた。僕の膝ほどまでの大きさの、人の形をした生き物。人形に近いと言ってもよいソレは、黒いボロ布みたいな装束をまとい、漆黒の髪を体に巻き付けるように長く伸ばしている。

一見して気味の悪い物体だった。

旅人

「お前は何なんだ？」

かんだかい声がソレから発せられた。

「何者だ!？」  
「通りすがりの人間だよ」「人間だと?」

ソレは胡散臭そうに僕を見た。大きな瞳が前髪の下で、爛々と輝いている。

「そんなはずは無い。人間に我の姿はみえない。見えるとすれば死に近づいた者だけだ! 貴様は違う」

「それは世間を知らないというものだよ。黒き神」  
ソレは更に驚いた様子で息を飲んだ。

「貴様は人の魔法使いか?」

「そうかもね。      ところで黒き神。この家になんの用だい?」

「我の存在を知っているのなら、我が何をするのかも分かっているのではないか?」

「そうだね」

僕は屋根の上を手をついた。その途端、黒き神は青白い顔色を更に青くした。

「何をした!」

「君をここに入れないようにしただけだよ」

何でも無いことのように言っていると、黒き神は怒りをもって僕を睨み付けた。

「入れないだろう? 直接手を触れなければ、君の仕事は出来ない」  
「こんな馬鹿な。人間の力が神である我を防ぐなど、信じられない」  
「やはり世間を知らないな。それに神と言っても君、下っ端だろう」

旅人

僕の言い方が気に入らなかったのだろう。

僕も言葉を選んで

いるが　黒き神は唇を噛んで悔しそうにしていた。彼はこの家に入りたくて仕方がないのだろうが、僕がそれをさせないようにしている。

そうしなければこの存在は、小さな命を奪っていく。

「貴様こんな事をして、ただですむと思っているのか」

「思っては無いけど……」

コートの内ポケットから懐中時計を取り出し、時間を確かめる。

既に日付は変わって数分が過ぎていた。「残念だったね。今日はもう君の時間は終わったよ」

僕はもう一度屋根に触れて、先程施した魔法を解いた。それから改めて黒き神を見据える。

「決められている時間を過ぎたから、もう仕事は出来ないはずだよ。さあ帰って上の指示を待つといい」

「貴様」

黒き神の手に銀の刃を持つ長い鎌が現れた。それをしばらく見つめてから、僕は自身の手をそれに向けた。

鎌は一瞬にして砕けた。

「馬鹿な！」

「抵抗せずに帰るんだ。でなければ存在ごと消す」

僕の脅しが本物だと分かったのか、黒き神はわずかな間を置いて消えた。

それを見届けてから僕は息を吐いて、肩の力を抜いた。下っ端とはいえ神族に逆らうのだから、緊張しないわけがない。

「愚かな事を」

低い聞きなれた声がすぐ側から聞こえた。目を向けると白銀色の

狼が立っていた。頭の中に語るのではなく、空気を震わせて耳に声が届いていた。僕は相棒に薄く笑った。

「怒っているね？」

「当たり前だ。おぬしは何故、そう愚かな事をするのだ。これは神の定めた運命。それに逆らう事は誰にも許されてはおらぬ。おぬしも例外ではないのだぞ」

「分かっているよ。でもね僕は人間だから、目の前で消えかかる命を無視出来ないんだ。愚かだと分かっている僕も僕は止めない」

白銀の狼は目を細めてから溜め息をついた。その姿はやけに人間臭く見えた。

「仕方がないのう。また逃げ回らねばならぬぞ」

「そうだね。嫌なら当分僕から離れて隠れていると良いよ」

正直、この相棒を僕の無謀な行動の後に続く騒ぎに、巻き込みたくは無かった。寂しくはあったが、それが彼の為にはいいと思った。

「おぬしはつくづく、ワシをみくびっておるな。ワシが神族を恐れとおぬしから逃げ出すとも思ったか？」

「だけどね」

「良いのだ。もう慣れてしまった」

狼はツンと明後日を向いた。素直ではない相棒のそんな様子が僕にはおかしく、嬉しかった。

「ありがとう、ナナス」

「お、やっと我が名を返す気になったか？魔法使い」

「奪ったつもりは無かったんだけど？借りていただけ」

「何故、おぬしはワシの名を勝手に使う？いい加減に己の名を定めよ」

「そうしたいんだけどね」

僕は苦笑しつつ空を見上げた。ちらちらと小さな輝きをつくる星が、暗い色の中にばらまかれていた。

「この子供を護るか？理を歪めても」

「護るよ。こんな小さな命がなくなる事を見過ごせない。例え僕の自分勝手なエゴでも……代わりに僕を連れて行けば良いのに」

「それはせぬだろう。分かっておるだろう？」

ナナスの声が僕の中で重く沈んだ。

翌日も僕はいつものように羊を村の門まで迎えに行き、放牧場まで連れて来てから、地面に転がった。すると僕の顔を羊達が覗き込み舐めだした。僕は羊の下に埋もれかけて慌てて半身を起こした。

「僕を心配してくれているのかい？」

ふわふわの羊毛に被われた体を次々と撫でてやる。

「大丈夫だよ。君達の大事なあの子も護るし、僕も頑張ってみるからね」

羊達は気持よさそうに目を細めた。

午後になっていつもなら子供達が集まってくる時間に、今日は誰も来なかった。そういった事は今までも無かったわけではないので、僕は気にせずすごし、夕方羊を送ってからまた木の下に戻って座る。

「やあ、久しぶり。君が来たのか。カリス」  
顔を上げるとそこには一人の男が立っていた。人間ではない。漆黒の衣装を身につけた男。彼も死を司る黒き神。死神だった。  
「呑気に挨拶などしている場合ではないぞ。はぐれ魔法使い」  
男は紫の瞳に不機嫌な色を見せていた。

「お前はなぜいつも、我らを怒らせる真似をするのだ」  
「僕は僕の心に従っているだけだよ。人間としてのね。それが神族の怒りに触れてしまうのは 仕方ないかと思うよ」

彼はしばらく僕に鋭い視線を向けていたが、溜め息と共に力を抜いた。

「お前はまだそんな事を言っているのか？」

「ええ。僕が人間である以上は、僕が何をしてもあなた達には僕を裁けはしない」

「今まではそれで済んでいるが、この先は分からんぞ。私はお前を気に入っているからな。私や私の眷族の邪魔をしても庇ってやった。だがなそろそろ大目には見てやれんし、庇いきれん。そしてお前が人間で在ることを望み続けるなら、お前は神族には勝てぬよ？」

それには答えずただ微笑んだ。

「だからこれは警告だ。今夜私が仕事を行う。邪魔をするな。もし私の声を聞かぬなら 審判神が動く事となるぞ」

顔見知りの死神は警告を残し去った。僕は木にもたれた格好で相棒の背を撫でながら時間を待った。

「どうするのだ？ 審判神などでできたら、おぬしは太刀打ち出来ぬぞ」

旅人

「ナナスが素っ気ない声で聞いてきた。  
「そうだね」

「今回栗毛の娘の死をおぬしはたまたま感知したが、できなかった確率の方が高かったのだ。知らずにおればあの子供が死ぬこととなつても、それは定められた事としとおぬしは受け止めただろう」

「そんな事はない」

「いや、そういうものだ。おぬしが自分で気付かぬとも、世界はそういう風に流れ、それが当たり前なのだから」

「だけど僕は知ってしまった。それを見てみぬ振りは出来ない。そして僕にはあの子を救える力がある」

「だがなカリス相手ではそうは言えぬだろう。あの黒き神は最高位神なのだからのう」

「出し抜くよ」

そんな自信はどこにも無かったが最善を尽くす。その心だけはある。

「行こう。時間だ」

村に着くとそこには思いがけないことが待っていた。村の大人達。彼等が僕を村の中に入れていないように壁を作っていた。手には武器や野良道具を持っている。

「こんばんは。何の騒ぎです？」

僕は警戒心を持った村人に緊張感の無い顔を向けた。

「村に入り何をするつもりだ」

大柄な男が槍を手に一步前に出た。僕を睨んでいたがその目には濃い恐怖心が見て取れた。それに気付かなかった振りをし、僕は首をかしげた。

「何って僕は……」

昼間近寄らない僕が夜中にやって来たのだから、疑われても仕方がない。上手い言い訳も思い浮かばず言いよどむと、左側から石が飛んで来た。それがこめかみに当たり痛みを作った。

「この魔物め！」

僕は石と声が飛んで来た方を見た。

「オレイルの家で何をやっていた！」

「オレイル？……ああ、キリーの」

「俺は見たぞ。昨日の晩、白いでつかい獣と屋根の上にいたところを！ありゃあ魔物だ」

そこで昨日の僕の姿を見られていた事を知った。一応辺りに気を張っていたが、見落としてしまっていたらしい。それからあることに気付く。

昼間子供達が来なかったのは僕を魔物だと思ったからだ。

（嫌われてしまったかな）

それだけが寂しく思えた。

「はじめから怪しいと思っていたんだ」

「俺達を殺すつもりだったんだ。この冬の病もお前がまいたのだから！」

「子供を手懐けて、この村に災いを呼ぶ気だったに違いない」

旅人  
僕はこめかみから流れ出た血を手の甲で拭いつつ、村人の声を聞いていた。

「僕はただの旅人です。信じてはいただけないでしょうが……。僕はやらなければならぬ事があります。道を開けていただきたい」

一歩踏み出す。ザツと村人は身を退いたが、すぐに武器を持ち直し輪を狭めた。

「聞いてはくれないようですね」

時間がもつたいなかった。もうすぐ日付が変わる。僕はそのまま歩を進めた。

「この化物め、来るな！」

村人達が手にした武器を振り上げた。僕は反撃するつもりは無かった。そんなもので僕は殺されはしないから。そして人に向けて魔法を使う気は更々ない。

振り下ろされる鍬を避けて、槍をくぐる。一人の村人の肩に手をかけて高く飛んだ。一瞬だけ村人の包囲から逃れたが数が多い。すぐさま取り囲まれてしまい、腕や肩を掴まれてしまった。引きずられるように地面に倒された。

その時、地面の下から密度の濃い空気が勢い良く吹き上がった。

「うわああああ」

村人達の悲鳴が足元から聞こえてくる。僕は上空へと逃れていた。相棒に助けられて。

「ナナス」

僕の襟首をくわえて近くの家の屋根に降りたナナス。彼は僕を放すとフイツと踵を返して、僕の影に潜った。

「おぬしはどうしてそうなのだ！自虐的なのにも程がある」

そんな怒鳴り声を残して。

「ありがとう、助けてくれて。お説教は後で聞くよ」

家の下には村人達が集まりだしている。彼等の顔は恐怖で歪み嫌悪が瞳にあった。そんな目を向けられる事に慣れてはいても、傷つけないわけではない。

それから目を反らせし僕はキリーの家の方角を見、そちらへ飛んだ。屋根伝いに飛んで行く。

「ナナス！」

子供の声が名を呼んだ。本物ではなく僕を。

声の方向を見ると建物の影に子供がいた。僕は彼のもとに降りる。「どうしたんだい？こんな夜中に」

いつもするように微笑むと、やんちゃな子供のリーダーは手招きして僕を導いた。

「キリーン家に行くんだろ？何をするかは知らないけど、こっち来て。近道があるんだ」

「……君は僕が怖くないのかい？僕は……」

魔物かもしれないよ？

声に出さなかった言葉を少年には分かったのだろうか。彼は不思議そうに僕を見た。

「怖いもんかよ。父さん達はナナスを魔物だって言うけど、そんなはずねーよ。俺、一緒にいたから分かるんだ」

飾りの無い少年の明るい笑顔に胸が熱くなった。

「あの壁を登ればすぐだよ」

目の前に立ちはだかる石壁に僕は手をかけた。

「気をつけて、ナナス」

僕はありったけの心を向けて微笑んだ。

「ありがとう！」

時間はもう一瞬も無駄に出来ない。急いでかけあがり壁を蹴って飛んだ。少年の言うとおりキリーの家の前に出た。そのまま屋根まで行こうとした。しかしそれはかなわなかった。

「！」

背中に何かが突き刺さる。突然の痛みには僕は地面に転がった。

「魔物め！死ね！」

キリーの家の側に隠れていたのだろう。数人の村人が僕を取り囲み、矢をつがえていた。更に数本の矢が体に刺さる。

「ナナス！」

意識の端で子供の声を聞いた。元気な少年の悲痛な叫び声。

（大丈夫。僕は死なないから悲しまないで）

悲鳴につられて目を上げた所には、放牧場の柵を作る杭を持った男達の姿。そして杭は僕に振り下ろされた。

「ぐわっ……！」

見事に胸を刺し抜かれ地面に縫い留められる。視界が真っ赤に染まった。すさまじい痛みで気を失いかけたが、瞬間、捉えた姿に意識は一気に浮上した。

（カリス！）

屋根の上にあったのは夕方会った死神。彼を止めなければならぬのに、さすがにこの状態では動けない。痛みのせいで集中もできず魔法も使えない。何も出来ず緩慢に意識が混濁していった。

それから動けなくなった僕を死んだと思った村人達は、村から離れた崖に僕を投げ捨てた。

「はぐれ魔法使い。そんな目にあってもまだ我らに逆らう力を使うか？人間の為に」

崖下に落とされて、どれくらいの時間が経ったのか。いつの間にか死神が現れ僕に話かけてきた。僕は目だけを向けると漆黒の男が冷たい目で見下ろしていた。

感情を一切持たない、どこまでも透明な神の瞳。

彼がここにいるという事は、僕は護れなかったんだ。あの子供を。心を突き刺す痛みは、体を今も襲うそれよりも深く、強かった。

僕は答える気力など無くてただ微笑んだ。それをどう取るかは彼次第だ。

「人間は愚かだ。自分達を助ける者と、そうでない者を見分けることも出来ない。己の偏った価値観のみで判断を下す。知らぬことはゆえ、救い手たるお前を殺したのだ」

痛む胸を手で押さえる。まだ塞がりきらない傷。内蔵まで達した傷は、そう簡単には治らない。

僕は殺された。それは真実。微笑みは自嘲へと変わった。

旅人

「人間は愚かだよ。それは分かっていたことだと思っていたけどね。僕を見て」

ようよう出た掠れた声。その声を作った言葉をカリスはちゃんと

聞き取ってくれた。  
「そうだな」

カリスは膝をつき僕に手を伸ばした。だけど僕はその手を拒んだ。  
「構うな。どうせ死なない身体だ」

強い拒否にカリスの指が止まった。彼は少し間を置き神らしくもなく溜め息をついた。

「そんな自虐的な事を言うな。 ナナスが心配している」

僕はすぐ側に寄り添っていた白銀の獣に、今更ながら気付いた。美しい毛並が赤黒く汚れている。ここに落とされた時、きっと助けてくれたのだろう。

「僕が感じ取れ無かった危険を、君が避ける事は出来ない。出来ないんだ。だからナナス、これは気にしなくていい事なんだよ」

沈んだ目をした相棒に手を伸ばし頭を撫でてやる。ナナスは目を細めて僕の手を鼻を押し付けた。

キリーの葬列が村の外れの墓地に行くのを、僕は遠くから眺めていた。その中にはちらほらと、子供の姿もあった。僕と仲良しかった子供達。

僕は声に出さずに彼女の冥福を祈った。しかし祈りながら思う。僕は誰に祈りを捧げているのだろうか。

## 旅人

命を生かすも殺すも世界の定めであり、それは世界を管理する神

族達の手の内にある。

「魔法使いとは因果なものだね。こんな世界は見たくは無かった」  
どんよりと曇った空の下で陰気な風が吹き抜けていく。

「しかしそれを望んだのはおぬしだ。世界を旅し世界の理を見た。その知識を得たいと望んだ。魔法使いという存在は、それを追求すれば手に入れる事が出来ると知っていた」  
「そうだね」

ナナスは僕を見ることなく実に素っ気ない言い方をした。そして僕も。

だけど彼の静かで重い言葉は、僕の中にゆっくりと沈みこんで広がっていく。

「知らなければ幸せだったかもしれないけど、僕はそれを望んでしまった。人が持つには重すぎる知識を」

愚かな若者は手に余る宝をそうとは知らずに手にし、そして自分の愚かさを嘆いた時には全てが遅く、戻れない所まで来ていた。  
それはずいぶんと昔の話なのだけだ。

「逃げ出したいようだのう」  
「逃げ出したいし、終りにしたいと思うけど、出来ない事だよ。この体が滅びない限りは」

胸の傷は既に塞がっていたけど、喪失への痛みはあり続ける。  
人ではなくなった身体と人の心が作り出す歪み。いつかこの歪みに僕は耐えられなくなるかもしれない。

旅人  
葬列は墓地に着いた。灰色の空に響く鐘の音。この寂しい音を忘

れないだろう。そう、僕は何も忘れられないのだから。

「行こう、ナナス。旅人に戻るよ」

無機質に告げて歩き出した。そんな僕の足にすり寄るようにナナスが並んで。

僕はくすつと笑って相棒の視線にしゃがむ。

「どうしたんだい？」

「おぬしが寂しそうだからのう。甘えてやっているのだよ」

「それはどうも」

相棒が見せた珍しい甘さに僕は身を委ねた。柔らかな体毛が覆う首筋を撫でて、そっと抱きしめた。

春の風が僕の髪をさらって過ぎて行くのを感じながら。

## 天の使い

風に乗って香るのは土と鉄の臭い。そして人の血肉の臭い。

僕がその国へ来たのは秋の終わり。そして内戦が始まって半年程経った頃だった。

「血の臭いが濃いのが」

隣を歩く狼に似た白銀の獣が、苦々しく吐き捨てた。

「そうだね……」

同意しながらも僕は違うことを考えていた。この国に近づくなつて濃くなつていった血の臭い。濃いなんてものじゃなかった。

その臭いしか感じとれない。

胃からせり上がって来る生理的な吐き気を、僕は意識から押し出し、歩き続けた。もう目の前まで城壁は迫って来ている。

「ナナス。嫌なら離れているかい？」

彼の嗅覚は人間の僕は勿論、普通の狼などよりもよっぽど鋭い。濃い血の臭いが彼の鼻を麻痺させてしまっているのではと、僕はこの国に入ってから気になってはいた。

しかし何時もと変わらない様子の相棒に、それを聞くタイミングを失ったままだった。

「このような物騒な国に、おぬし一人をほったらかしにはできぬよ。おぬしはただの人間相手には、極端な程 手出しをせぬからのう」

僕はこちらを見上げるナナスに肩をすくめて、苦笑した。

それから再び城壁を見上げた。かつては美しかっただろう、青石を積んで作られた城壁は、今や土や埃、人の血で黒く汚れていた。

この国は古い王国だった。今では珍しくなった王政をしいていたが、平和な国だと記憶している。

例え王による独裁国で、閉鎖的で、国民が異常なまでも王家を崇拜するように教育が、国民にはそれとはしらされずなされていてもだ。この国には戦はなく、地形の利から他国の侵略も受けなかった。

ただ、他国から取り残されつつあったが。そんなものは外を知らない国民には、どうでもよい事だろう。

僕は城壁にそって歩いた。静かなものだ。人気どころか、カラス一羽いない。乾いた土が乾いた風に吹き上がる様は、余計にももの悲しさを感じさせた。

「なんだい？」

旅人

た。不意にコートの裾を引くナナス。彼は視線だけでそれを僕に教えた。

僕がそちらへ顔をむけた時には、城壁から外れた、崩れかけた建物の影にいた者は、サツと身を潜めたところだった。

「ナナス。影に」

いつも町へ来る時にはしているように、ナナスを僕の影に導こうとしたが、ナナスは動かなかった。

「ナナス？」

「影に入れば何かあった時に、おぬしを護れぬ」

「その心意気は嬉しいけど、こここの人間は君を怖がるよ？こういう状況下だからよけいにね」

「ふんつ。ワシどころか、おぬしも恐怖の対象となろうよ。こんな状況下なのだ」

「それもそうか」

ナナスの指摘に軽く笑った時、城壁から聞こえた音に顔を上げた。

「ナナス。着いて来れるね？」

「ワシに言うておるのか、その言葉は！」

いきなりの僕のセリフに疑問ではなく、苛立ちをみせるナナス。それを了解ととり僕は意識をほんの僅かだけ、集中させた。

視界がすりかわり、周りには濁った空色があり、今まであったも

のは足元にある。

あの場で誰かが見ていたなら僕は忽然と、消えたように見えただろう。本当は空気の密度と摩擦力を変化させ、僕の身体に加速をつけて上空へ飛んだだけだ。

空の風を使い高度を保ちながら、足元をながめる。すぐそばのナスの長い尾が、視界に入った。

「軍隊だ」

城門からはき出される規則正しい人の流れは、訓練を受けた軍人達だった。

もしかしたらさっきの人影は、この軍隊を見に来ていた民衆の人だったのかもしれない。

数十人の軍人らは列を乱さず、騎乗の人間の後を小走りについて行った。

「追うのか？ワシは反対だ」

夜明けを思い起こさせる深い紫の瞳に、強い拒否が浮かんでいた。

「ナス？」

旅人

神族が関係していればともかく、それ以外ではあまり僕の行動に干渉をみせないナス。だからあからさまな否定を無視する事は出来ない。

宙で膝を折り、ナナスと目線を合わせた。

「あれを追えば、人同士の戦いを見る事になるのだぞ」

ああ、そういうことか。

ナナスの優しさに僕は微笑む。

「ありがとうナナス」

人と人が戦う。命を取る事を大前提にしてはいないだろうが、そうなるだろうところを僕が見、どう思うかがわかっているから止める。

「君は僕以外にもその心をみせれば良いのでは？」

「余計なお世話だ」

ムツと目を細めたナナスは、背を向けるついでに長い尾で僕の肩を叩いた。

照れ屋で天邪鬼、そして気の強い相棒の背を撫で立つ。

「ナナス。僕は世界の意思によって旅をし、同じモノによりこの国に導かれた。ならこの国に起こっている事を見なければならぬんだ。それが僕のしなければならぬ事だよ」

見下ろすとナナスの瞳には諦めたような、光がやどっていた。

旅人

「一番初めに世界との約束を破った僕は、世界が望むことを行わな

くってはならない」

「そんな古い約束を、いつまでも……。おぬしは真面目すぎるのだ」  
「約束は約束だよ」

軍隊が進む方へ、風を流し身体を進める。生暖かい空気が手足に巻き付いてくように感じる。

さほども行かないうちに、金属がぶつかり合う音と悲鳴が聞こえてきた。

黄土色の乾いた大地。そこでぶつかり合う音と悲鳴が聞こえてきた。

片や統制の取られ洗練された動作の軍人。片や寄せ集めの民衆。戦えばどちらに分があるか、見るまでもなく明らかだ。

農機具や家事道具の延長のような武器しか持たない民衆が、しっかりとした武器を持ち、訓練を受けた専門家に勝てるわけがない。

無駄のない様子で民衆を地面に押さえつけ拘束していく軍人達。それを見ながら、それでいいと思った。

実力の違いがあるから無駄な血は流されない。国も無闇に民を失えば、たちゆかないだろうことは認識しているから、いきなり殺しもしないだろう。

僕はそれに少しホツとした。民がへたに抵抗しなければいいんだ。

「不思議だと思わぬか？」

「ナナス？」

「この国は昔から軍事に力を入れておった。それは今も変わらぬよ  
うだ。そして国民は国王を崇拜するように教育されている。国民に  
は国軍、王に逆らう意思など持ちようは無かったはずだ」

「そんな事はないよ。人は目隠しをされたままではいけない。長  
い時間がかかっても、それを外そうとする人間は必ず現れるものだ  
よ」

完全に国民の意志を掌握出来ていた国王。だけど永遠など有りは  
しない。いつかは国王の真実も、世界の真理も気づく者が現れ、そ  
して考える。

この国は正しいのかと

だから起こるべくして起こった内乱だと僕は思った。

「……では何故、半年も内乱は続いている？国民は生かさず殺さず  
の生活を強いられていた。それは今も変わらない。なのに何故、そ  
んな国民を未だ鎮圧出来ず、内乱は続いているのだろうな」

「 そうだね」

ナナスが言った事は僕も考え無かったわけではなく、だけど人の  
未知数な可能性がそうさせているのかもしれないと、ぼんやり考え  
ていた。

だが現実をみると、戦力の違いは酷すぎる。

「良くて三ヶ月くらいだろうか？」

自分のつぶやきにナナスが頷いた時、数人の民衆が思わぬ所から現れた。

建物に隠れ軍からは死角になる、そんな場所から軍の横から襲う民衆。

「ほう、奇襲か。よい手だな」

「馬鹿を言うな！」

感心したようなナナスに鋭く反論する。

軍隊も驚いた様子を見せていたが、直ぐに体制を立て直し反撃に転じた。それはもう拘束ではなく殺傷。

命の危険を感じて軍隊は対処を切り替えた。

「あんな事をすればそうなる」

苦々しく奥歯を噛み締めてうめくと、僕の袖をナナスが引いた。

「分かっているな。おぬしは手出ししてはならぬ」

「……分かっているよ」

ナナスが引いた腕を、逆の手で握り締める。そうしていないと、力を使ってしまいそうだったから。

旅人

人同士の争いに魔法を介入させる事は出来ない。それは昔、魔法使い全盛期よりの約束事だった。

それでも目の前で失われて行く命を、黙って見ていられない。衝動的な感情が走りだしかけた時、それは起こった。

「！」

「これは！」

僕が息を飲む横で驚愕の声上がる。足元で起こった事を凝視した。

地面に叩きのめされていた民衆の背後から、勢い良く風が巻き起こり、軍隊の正面へ向かって吹き抜けていく。風は民衆には一切影響を与えず、軍人達を背後へと飛ばした。それほどの強風だった。

不自然に生まれた風。その風に混ざった、覚えのある嫌な気配に、僕の精神を制御するタガが外れた。

（また神族か！）

「待つのだ、魔法使い！」

低い声が焦った響きを宿したのを聞いたが、無視する。身体を支えていた風に命じて下へと向かう。

いや、向かいかけたが先に、僕が操っていた風の支配権が変わっていた。僕はピクリとも動けなくなって横目で彼を見た。

「邪魔をするな！」

「月光！」

その名になんの支配力も強制力もありはしない。だけど僕はかつて持っていた名前を呼ばれた瞬間、冷水をかぶったみたいに冷静さをとり戻せた。

「ナナス。悪いんだけどまた僕は、厄介な事を背負うよ」

「いや、それはわかる。構わぬよ。だが、冷静さを欠いては何も出来ぬだろう。ワシが言いたいのはそれだけだ」

「ありがとう」

微笑をもどすと身体にかかっていたプレッシャーは、あっさりと霧散して、僕の身体は意思どおり地面に降下した。

続けられている戦い。その中に降り立ち、僕は目当てのモノを見つけ跳んだ。

民衆の中に飛び込む。

視界に入ったのは細身の人物。その人間に向けて圧縮した空気を放つ。相手はそれに押される形で、背後へと飛んだが、僕の力によってではなく、僕の力を利用して後方へ飛んだようだった。

旅人

一陣の風が過ぎ去るがごとく、僕とその人物は町から天空へと移動していた。

空に逃げた細身の身体を包む白い服と、まとわりつく長く真っ直ぐな黒髪。

「女性？」

馬鹿なと思った。僕は確実にあの風を起こした人物を捉えた。そして僕の力を利用して、逃げ出した目の前の人間。いや、見かけは人間とそっくりでも、それは人間ではありえない。

彼女が持つのは天の力。神族が持つ力の波動が見える。

なのに彼女は神族ではない。神族が持つ圧倒的な強さが無かった。

それで天の者でも、弱い立場の者だと推察した。天の使いだとか。

「ナナス。天の使いは女性体も存在するのかな？僕は初めて見たんだけど」

「ありえない。奴らは中性的な姿をしている。どちらかの顕著な特徴など、持たないぞ」

細身の女性体を追う僕とナナス。互いに視線と驚きを交わした。

「人間の肉体に乗り移っておるわけでもないようだな。しかしあの髪……黒髪だと」

「そうだね。それもありえない。姿を偽っているにしても、あんな日の光の下でも、輝かない黒だなんて」

旅人

長い髪は太陽光を浴びているのに、一筋の艶やかさも現さず、風になぶられ蛇のようにうごめいている。

「ナナス。彼女を地面に下ろせるかい？　僕がやると手加減が出来そうに無いから」

冷静さは取り戻せているが、天の者を目の前にしていつまでもそうしてられるか、自信が無かった。

「分かった」

ナナスが応えるとすぐに、天の使いの身体が見えない何かに拘束され、ガクンと落下を始めた。

地面に着く寸前に落下は一度止まり、そして改めてドサリと落ちた。それを見ながら僕とナナスも地上に降りた。

そこは町から数キロ離れた荒野だ。数時間前に僕はここを通った。人の気配どころか、生物の気配もあまり無い乾いた地面が広がっている。

乾いた明るい茶色の上に、転がった白い身体を見下ろす。

やはり彼女は天の使い、人間の言うところの天使だった。神族が使役する存在で神族と同じ力を持つが、その力は神族とは天と地ほども違う。下位の神族にも天使は敵いはしない。

旅人

彼女も天使ならばその姿は、天の者としての姿をしているはずだった。僕もそう多くの天使を、見た事があるわけではなかったが、彼らは皆一様に、十代の少年のようなほっそりとした身体をし、髪も目も純白だった。さらに彼らの背には、その象徴たる虹色の光を宿す、白い翼を持っている。

彼らの姿は、天の者であると分かっているにもかかわらず、美しいと感じられるものだった。

だが彼女は違う。

女性のそれもかなり魅力的な肉体を持ち、長い艶の無い髪は黒。瞳も光を吸い込む黒だった。

「ナナス……」

僕は注意を促した。必要以上に彼女に近づくなと。

それから再び視線を下へおろす。彼女も僕の視線に気づき、黒い瞳でこちらを見、先に口を開いた。

「まさか魔法使いが未だに、存在していたとはね。驚いたわ」

透明感のある高い声だった。その声は女性が持つものだが、天の者の特徴も現し美しいかった。

「天の使いが何の為に、人間の争い事に手を出しているんだい？ 天が 神族が直接人間の運命に関与するなんて、世界が許さないはずだけど？」

自分でも声が硬く、冷ややかになっているのが分かった。どうしても神族に関わる時、僕は感情を押さえられなくなる。ナナスが心配するのは仕方ないなど、自嘲した。

旅人

「天の者ですって？」

彼女は鼻で笑った。それはとても人間臭い仕草にみえた。自然で違和感がない。

「この私の姿をみて、本気でそんな事を思っているの？」

そのとおりだ。僕も彼女を天の者だとは信じられない。

天使ではあり得ない要素が多すぎた。

だけど力や存在が持つ気配は、天の者だけが持ち得るもので、正直混乱していた。

「君は天使だ。それは間違いない。だけど……君は感情を持っている」

「そのとおりよ。私は天使だけど感情を持っているわ。持つてはいけない感情をね」

天使も神族も、人格はあっても感情は持っていない。少なくとも人間のような感情はない。せいぜい理性で簡単に制御可能な程度の、底の浅い感情だけだ。

世界の理を管理する者達に、感情など必要無いのだと聞いた。

規格外の神族がないわけではないけど。

神族以上に感情を持たない天使。なのに目の前の彼女は今や面白いがるような目をして、僕を見上げていた。

「だから天から逃げたのよ。天から裁かれる前にね」

「なるほどな。天は感情を持った天使など、野放しにしておきはせぬだろうからな」

感情がないから天使は絶対に神族には逆らわない。そして神族も自らの役目を放棄する事も、歪ませる事もない。

「何故君は感情を？あり得ない話じゃないけど、やはり珍しい事には変わりないよ？」

彼女は神族の命令で動いているわけではない。そうわかった事で力が抜けた。警戒を怠るわけではないのだけだ。

「感情をいつから持ってたかなんて分からないわ。気付いたら私は他の天使とは違っていた。だけど感情を持った事でより世界がわかったわ。そこに生きる人間がわかった。それに神の事も」

「…… ナナスやインドリ達と同じパターンだね」

納得顔で呟いたら、ナナスが僕の足のの上に座りこんだ。

「インドリはともかく、ワシをあんな黒猫と一緒にするな」

「あ ごめん、ごめん。謝るから退いてほしいな。君はものすごく重いから」

しかしナナスは全く動こうとはしない。そうとうご機嫌を損ねてしまったようだ。

旅人

「やれやれ っと、話が逸れたね。じゃあ君は神族から逃げて、

地上へ来たんだね」

「そうよ」

「分からないな。なら何故、力を使うなんて派手な真似をするんだ。すぐに見つかってしまっよ。それにその姿は一体どうしたんだい？自分で姿を変えているんじゃないだろう？」

「勿論。私の姿は私そのものよ。魔法使いのようにほいほい簡単に、姿なんか変えられないわよ。　　ねえ、答えなんてもう分かっているじゃないの」

「……………」

答えには達していた。

彼女の姿を変えたのは、彼女がこの世で最も忌むべき力“邪闇”にに染まっているからだ。

光の対極に位置する闇の力。夜の闇ではなく人から生じた、負の心が凝り実体化した力 邪闇。

邪闇に手をだしてはいけない。それは力ある者達の中での暗黙の了解だ。

だがその禁危の力は神の力と同じく、万能の力であり全ての望みを叶え、あらゆるものを手にすることが出来る力でもある。

旅人  
彼女はその力を持つ。だから身体も光から闇へと変化したのだから。  
う。

「まさか君は望んで闇を受けたのかい!？」

「フン 私だって天使の端くれだったのよ。闇の恐ろしさは理解しているわ。……神から逃げた途端、私の身体は闇に染まったのよ。神の意に反したただけでこうなった!そんな人間ならいくらでもやっているに。そうでしょう?魔法使い」

「否定はしない」

「なら何故私が闇に染まらなくちゃならないの?私は自分の命を守る為に逃げ出したただけだわ。それを世界は許さないと言うの!」

フワリと彼女の髪が揺れた。ナナスが仕掛けていた拘束が、彼女の力によって解けていくのが見える。

ナナスがサツと立ち上がり僕の前に出た。

白い身体に纏いつくように立ち上る濃い影。闇の力に本能的な恐怖が沸き上がってくる。

思わず一歩身を退いてしまっていた。

「人間の事に手を出した理由を聞きたい」

その疑問だけが残っていた。

もしか闇に染まった心が、人間の争いを望んだのか? だけど彼女は民衆側についていた。

「聞こえるのよ。感情を持つ前からずっと聞こえていた。人間の声が。神に祈る声が聞こえるのよ。神に救いを求める声がね。だけど神は動かない。指一本動かさないわ！簡単に人間を救える力があるのよね！」

「その理由は君だつて分かっているはずだろう！神は独断で地上に干渉してはいけない。出来ないんだ。良くも悪くもだ！」

だからこの理から外れる僕の存在を、神族は許してはしないだろう。そして僕もそうなった神族を許しはしない。

「ええ 分かっている。でも私には人間を救える力があるのよ。その力があるから人間に手を貸しただけ。正しい心を持つ人間が何故、虐げられて苦しむ必要があるの？苦しむべきは彼らを虐げる人間だというのが！」

「それで手を貸した？」

「そうよ」

彼女は彼女だけの意思で人の世界に介入した。そこに神族の意思はない。その事に安堵した。

僕は彼女の意思をどうこう言うつもりはない。僕だつてやっていることだ。ただし、僕は人間として、だ。

彼女は明らかルール違反をしている。人の世界でのルールに。

それだけは伝えなければと思った時

「ちょっと囁けば良かったのよ」

「え？」

何を言い出したんだ？意図が分からず聞き返す。

「あなたがそんな風に我慢をしている事はないんだって。正しい道を開きなさいとね。そう言ってあげたのよ」

「な……なんだって……」

耳を疑った。今の話では彼女が民衆をそそのかしたように聞こえる。

内乱を起こせと。反旗を翻せと

だけどそれは真実で、この内乱を起こすきっかけはこの天使だったのだ。

「なんて事をしたんだ！君は一国の歴史の流れを、変えてしまった！天の者である君が……」

呆然と呟く僕に、嫣然たる笑みを浮かべる天使。

「そのどこが悪いの？皆 心の中では国王と国王が作ったあの国の制度を、壊してしまいたいと思っていたのよ。国王さえいなければ自分達はもっと自由で、もっと満ち足りた生活が送れると、彼等は知っていたのよ。だから時間の問題だったはずよ。私が背中をおさなくても、同じことは起こり得た」

旅人

「そうだ同じことは起こっただろう。君がいなくても。僕もそう思うよ。それでも、それは民衆自身の意思で起こさなければならなかったんだ！きつかけをつくるのも彼等が彼等の意思で、行わなければならなかったんだ！」

そうでなければ力ある者が世界を自由にしてしまう。

「綺麗事ばかり並べないで欲しいわ。そんな事で真実 人が救えると思っっているの？ あり得ないわ。世界はね光だけで成り立ってはいないのよ」

「分かっている！！」

そんな事はこんな天使に言われなくとも分かっている。どれだけそれを見てきたと思っっているんだ。世界の光も闇も。表も裏も。天も地も。

「君に何がっ……！」

再び冷静さを欠きかけ上げた声は、一筋の閃光によって止められた。

視界が両断され、その中で細い身体が地面に倒れる。銀の刃が付き刺さった状態で。

「魔法使い！」

ナナスの声に顔を上げる。

旅人

「あなたは！」

銀の刃は優美な矛の刃だった。それを握る人物もまた、流麗な姿をし、そこに立っていた。

緩く波打つ白銀の髪に紫の瞳。白い衣を身に着けた長身の男は、やはり人間ではない。

その個体は初めて目にしたが、彼が何者かは名乗られる前にわかった。

「審判神……」

「それも上級のようだのう」

審判神は無表情のまま矛を天使から引き抜く。

天使の身体からは、人間のように血液が流れ出しはしない。闇に染まった身体からは代わりに、黒い靄のようなモノがフツと抜け出した。

「忠告しておく魔法使い。これより先、手を出す事は無用」

低い美声が抑揚もなく僕に向けられた。

「なら僕も忠告しておくよ。その矛からさっさと手をはなさないよ、あなたも闇にそまるよ。闇はとても平等だからね」

旅人

神族でさえ闇に抗う術はない。闇の洗礼を受ければ全てを飲み込まれる。

身体も力も意思も。

銀の矛は刃から徐々に黒くなり、ボロボロと朽ち落ちて、最後には灰が風の中に散るように空気に溶けて消えた。

審判神は己の武器から手をはなし、矛が消滅するさまを冷やかな目で見送った。

審判神を一瞥し、僕は倒れたまま動かない天使の傍らに膝をついた。

「魔法使い！」

ナナスと審判神が同時に呼ぶ。ナナスは心配そうに。審判神は堅い声で。

「御心配なく。僕は魔法使い。対応法くらい分かっているよ」

だけど僕はあえて審判神に答えた。

「手を出すなと申したはずだが」

「聞きましたが、従う義務はないよ」

審判神から視線を外し天使を見つめた。天使の身体の傷は塞がらだしていた。服も綺麗に修正されつつある。

旅人

闇の身体とは便利なものだな 自分の事を棚に上げ、急速に塞がっていく傷をみて、感心すらした。

「君 もう動けるね？」

声をかけると見開かれまたま動かなかった目が、僕の方を見た。それを返事ととった。

「なら逃げるんだよ。僕がその時間をつくってあげるから」

耳に囁くと黒い瞳に疑問が浮かんだ。

「僕は君のした事は許せない。でもね問答無用で殺されていい命なんて、どこにもないんだよ」

天使の黒い髪を一束、するりとすくい流しながら立つ。審判神と対峙する為に。

音もなく僕の隣にナナスが立った。

「やれやれ。本当におぬしは阿呆だのう」

「もうとつくに知っていると思っていたけど？ナナス」

「神族に逆らうつもりか魔法使い」

「それもとつくに知れ渡っているはずだと、思ってたんだけど。まさか僕を知らないなんてないよね？」

僕の周りに風が走る。

旋風は範囲を広げ審判神へと向かう。しかしすぐにその風は消え去り、静けさを取り戻す。

「魔法使い 警告だ。今すぐ立ち去れ」

僕は天使を背後に庇い、くすつと笑った。

上位の神族に勝てる見込みなどない。そんな事は知っている。そしてその常識を元にこの審判神も、僕の行動を愚かしいと思っっているのだろう。

「よく耳を澄まし聞くと良いよ審判神。僕の名前は 月光だ」

それは鍵だった。一瞬で全てを変える言葉。

名前自体にもう力はない。僕は未だに、自分の名前を失ったままだ。あの時から。

だけどここの言葉は魔法を解くパス。僕が声に乗せる事で魔法は解ける。

無表情だった審判神の顔が、僅かに動いたのを見た。それから腕を上げるのも。それらをみながら僕は僕の中から溢れる出す力を、制御もせずにはったらかした。

僕を中心に渦巻くのは、さつきとは違い、純粹な力の流れ。僕から放出された魔法の力が気流を作る。

長い間封じていた力が一気に解き放たれ、外へ向かって放たれる

のを眺めた。

「その髪、その目、その姿……！お前があの、はぐれの魔法使いか」  
「本当に僕を知らなかったのか？驚いたね」

肩を竦めて苦笑し、手を上げた。それに合わせて肩に乗っていた長い髪が零れ落ちる。

長い髪を払ったと同時に力の放出がとまり、僕の手の中には一本の棒が現れた。

銀色の僕の身長よりも少しだけ長い、飾り気のない棒は僕の杖。魔法使いの力を共鳴増幅させる魔法使いの杖で、僕のもう一つの相棒。これを手にするのはとても久しぶりだった。

直接触れた馴染みの感覚に、ついつい口元が緩んでしまう。

杖を肩に軽く乗せ足を退く。それを見た審判神は目を大きく開いた。

いたはずの天使は既に消えていた。それにやっと気付き、その事実には驚いたようだった。

馬鹿な顔に向けて手を払う。

審判神はすぐさま反応し、不意討ちに飛ばした風の刃を後ろへ飛んでかわした。

旅人

「ほらほらぼんやりしている暇なんて、ないんだよ？」

後ろへ飛んだ審判神を追い、開いた距離を一瞬で詰め、杖を直接その聖なる身体に叩き込んだ。

しかし寸前にそれかわされ、無為に流れてしまった力に従い、微かに身体をずらして隙になった脇腹に手をヒタリとあてる。

審判神が身体を強ばらせたのがわかった。

『闇よ』

魔法を囁く。掌に小さいながらも黒い影の塊が生まれ、その力で審判神を大きく飛ばした。

「ナナス！」

鋭く呼ぶと、すぐさま耳の側で大きな羽音がたった。僕はそれに掴まる。

次の瞬間には地面ではなく、上空へと逃れていた。

周りは濁った空色で、あの国も荒野もずっと向こうに小さく霞んで見えた。

「ありがとうナナス。このまま巧く逃げ切れるね？」

「まったく無茶をする わかったから早くその力を封じよ。でなければいくら脚の早いワシでも、すぐに見つかってしまうぞ」

大きな背によじ登りつつ、勿論だよと答えた。僕としてもこの姿

でいるのは不本意なのだから。

杖を体内にしまいこみ、そこに全ての力を流し込むイメージを作り出す。それだけで僕の魔法の力は流れを変え、外へと向かっていったモノが内へと固まってゆき、最後には封じられる。

それは解除するよりも少しだけ、時間をようつするけど瞬く間の封印。

長く伸びた銀の髪は短く黒くなり、今はもう目も人間のもので、そうとしか見えない姿になっているはずだ。

フツと息を吐くのと、ナナスが溜め息をついたのは同じタイミングだった。

ナナスの背に乗って空を駆けるのも久しぶりだった。こんな時だけど、どうしても心地良さを感じてしまう。

勿論いつもの、狼に似た犬の姿をしたナナスに乗れはしない。彼も本来の姿、天狼に戻っていた。

白銀色の狼の肢体に鷹の翼を持つ、世界で一番脚の速い獣 天狼。天狼が本気になれば神族でさえ追いつけない程速く、空を駆ける事が出来る。

今回もだけど逃げる時、いつもナナスの力を当てにしてしまう自分が、本当に情けなく思う。

自分の意思を通す為に他の力を当てにするのだから。

「ナナス もう少し行った所に霊穴があるから、そこに降りてくれるかい」

「分かった」

地上には幾つか、世界の力が集まり溜まる場所が在る。そこはかなり強い地の気配があるおかげで、僕の気配もナナスの力もうまく隠す事が出来るはずだ。

滑るように霊穴がある山に入る。

僕はナナスから降りて、大きく息を吐き出した。思った以上に疲労している。

立っているのがやっとで、近くの木に寄りかかりかけた僕の身体を、ナナスは大きな口で掬い上げて、自身に寄りかからせる形で僕を座らせた。

温かく柔らかいナナスに、ほっと安堵が広がってしまう。

「ありがとう」

「封印を解かずとも、逃げるだけなら出来たであろう。たとえあの者が上位の審判神だとしても、ワシとおぬしの力をもってすれば可能だ」

「そうだね」

だけどそれでは彼女を逃がす隙は作れなかった。

僕ので隠さなければあの神は、彼女を見失なわなかっただろうから。そして動きを抑える為にも、解除時の勢いは必要だった。

「おぬしが犠牲になってまで救う価値など、あの天の使いにはなかった。どちらにしろ時を置かず消滅するのだからな。あの天の使いの闇が自我を消してしまうのはそう遠くはない」

「そうだね」

闇に堕ちたモノはいつかは闇そのものになって、世界を漂うだけの存在へと変わってしまう。彼女も例外なくだ。そしてその時はもうすぐそこまで来ていると、直接接触した僕には分かっていた。

「僕は彼女の行動を肯定しているわけじゃないんだ。でも彼女が人間の為に動いていた事や、彼女を動かしていた心まで否定はできない」

方法は違っていてもその心だけは、僕と彼女は同じなんだ。

目を閉じると身体にのしかかるような疲労感が、一層濃く感じられた。

「おぬし分かっているのだろうな。おのれの力を解放するたびに、自らの首をしめているのだという事を」

「分かっているよ」

力を使えば使うほど、人間としての身体は失われていく。望まない姿へと変化していく。それは分かっている。

「仕方がないな。おぬしがおぬしであるのは、そうだったところなのだろうから」

諦めた口調でナナスはうめき、起こしていた顔を前肢に乗せて、緊張を解いた。

彼の背の大きな翼が、僕の上にフンワリ乗せられる。眠れと言われているようだった。

「ありがとうナナス」

数日 霊穴で過ごし、再びあの国へ向かっていた僕達の前に、彼女が、天使が現れた。

「君……」

まさか僕の前に姿を見せるとは思っていなかった。

「何故ここに？」

余裕のある表情で笑う女性体の天使は、軽く腕を組んで僕を見つめていた。

旅人

「私があるあなたの前に出てきた理由？それともどうやって神族ですら見失ったあなたを、私が見つつけられたかって事？」

「理由かな。闇の力は地上では、神族の力よりも融通が利くからね」  
「正解」

にっこり笑う顔も本物の人間のようにだった。感情を持つ者の本当の笑顔だ。

僕はその笑顔につられて微笑を浮かべた。

「良かったよ。君がちゃんと逃げ切れていて」

「あなたのおかげだわ魔法使い。あなたが私を何故逃してくれたのかは分からないけど、これは借りにしておくわね。それを言いに来たの。だって私は最後まで私の力を、私の思うままに使っていかつもりなんですもの」

それは僕が否定した方法で、人間に手を貸していくという事。それを僕に伝えに来た彼女が、なんだか可笑しくてたまらなかった。

「知ってるの？君はもうすぐ心を失うよ。力を使えば使う程、闇に近づく。時は早まるよ」

「知っているわよ。だから何？叫ぶ声が聞こえてくるのに、助けられなかった頃に比べれば最高に良い気分だわ」

「そう」

旅人

潔ささえ感じられる天使。今の彼女はそう遠くない未来に、消えてしまう。本人も分かっている。

なのに自分の意思を曲げたりはしない。保身に走りはしない。

彼女が眩しく思えた。

「分かってる？僕は君を止めるよ。僕の目の前で君が同じように力を使えば」

「分かっているわ。だけど私は負けないわ」

「……了解」

両手を広げて微笑んで、肩をすくめた。それは半分は彼女の意思を受け入れた僕の現れ。

彼女ももう一度につきりして、それから背に翼を広げた。

その翼も真っ黒だった。とても美しいとは言えない。なのに闇に對して常を感じる嫌悪感を、僕は持たなかった。

「ああそうだわ。あなたがあの、魔法使い月光だったのね」

「残念ながらその名前は、もう僕の名前じゃないけどね」

「名無しの魔法使い？」

「まあ、そうだね」

旅人

「勿体無いわね。綺麗な月の光みたいな髪をしているのに。あなたの本当の姿、凄く綺麗だったわ。どんな神族よりも綺麗だった」

「そう?。」

「だから月光ってぴったりの名前よね」

そんな事を言い残して、彼女は空に舞い上がって行った。僕はそれを見送ってから歩きだす。

「追わなくて良かったのか?。」

「今日のところはね。わざわざ僕の前に現れてくれたからね」

「つくづくおぬしは甘いのが。神族以外には」

「そう?。」

呆れた様子のナナスの頭を撫でて、空に視線を戻す。もう彼女はいない。かわりに遠くから風に乗って、血の臭いが降りてきた。その中で歩みを再開する。彼女がきっかけとなった出来事を、最後まで見届ける為に。

終わり

## 猫

大陸中央を幅広く埋めている砂漠は、宵の口に最も過ごしやすい気温になる。僕とナナスは太陽の沈んだ地平線を目指して、歩を進めていた。

犬に姿を変えて隣を歩くいるナナスが、足を止め宙を睨み唸った。

「どうかしたのかい。ナナス？」

「嫌な気配だ。此方へ近づいて来ておる」

苦々しくうめくナナスの視線を追う。宙には夜に差し掛かった群青色の空が有るばかりで、鳥一匹飛んではない。

つかんだ気配は、危険なものではないようだ。ナナスはあまり緊張していない。僕も周りに意識を拡げ、よくよく探ってみた。そして見知った気配に辿り着いた。

と、同時に何も無い宙から、黒い塊がズルリと地面に落ちてくる。それに僕は声をかけた。

「久しぶりだねクロさん」

地面に降りた黒い塊は黒い猫。短毛の艶やかな漆黒の毛に、同じ色のくりつとした目の猫は、この世ではありえない全てが黒い猫だった。

旅人

「久しぶり。魔法使い」

猫の口から舌足らずな、子供のような声が発せられた。丸い目が僕を見て、微かに笑うように口を動かし、それからナナスを見る。

「相変わらず無愛想な犬だね。挨拶くらいしたら？」

「フンツ、何故ワシからおぬしに挨拶せねばならぬのだ。おぬしこそ相変わらず、目上への態度がなっておらんようだな」

「目上？寝言は寝て言いなよ。君が僕の上だったなんて事、今まであった？」

「貴様こそ、その冗談は笑えぬぞ」

ナナスとクロさんは互いを睨み付け、一步も譲らない言い合いをする。それはいつもの事だった。顔を会わせれば互いを罵り、放っておくと本格的に喧嘩を始めてしまう。それを避ける為に、早々に止めるようにしていた。

「ところでクロさん。何か用でもあったのかな？こっちにいるのは珍しいんじゃないかい？」

ナナスを押し退けて、小さな黒猫の前にしゃがみこむ。猫の頭はそうしても低い位置にあったが、彼はすぐにフワリと宙に浮き上がり、僕と視線を合わせてきた。

「魔法使いに伝言があつてきたんだよ。インドリからね」

「インドリから？なんだろう」

旧知の人物の名前に首をかしげた。インドリとは古い付き合いだけど、もう何十年もの長い時間、会っていなかった。

それどころかインドリの側にいるクロさんが、こうして僕の元へ来ることも、実に珍しい事なのだ。

「魔法使い 君さ最近黒い天使を助けたでしょ？」

「黒い天使って…… 人格を持って闇に染まった、あの天使の事かな」  
「そうだよ。その天使だよ」

少し前に とはいっても半年くらいは経ってしまっていたけど  
出会った天使を思い出す。

はじめ僕は、闇に染まった天使がしている事を、止めようとした  
けど最終的には、彼女を神族から助けた形になってしまっていた。

あれから彼女の姿は見ていないし、彼女が何がしら行動を起こし  
たという事も感じてはいない。

「何故クロさんがあの天使の事を知っているんだい？」

「あの天使がこっちに来て、インドリと関わりを持つちゃったから  
さ」

「……なるほど。彼女はそちらでも自分の主義を通したんだね」

「そのとおりだよ」

弱き人間を救うために世界の理を無視し、自分の力を使う天使。彼女の行動は確かにルール違反だったけど、その心は純粹に人間を救いたいというものだった。

おそらく彼女はインドリの住んでいる世界に入り、同じ事をしたのだろう。それでインドリと知り合ったらしい。

「インドリは彼女を……どうにかしようとしたのかな？」

排除と言いかけて止めた。インドリなら殺しはしないだろうから。でもインドリも僕と同じで、彼女の行動を黙認もしないと分かっている。

「追っ払いかけたよ。でも君が関わっているのに気付いたし、何よインドリがあの子に興味持ちちゃんだ。話しようとした。こういうトコ、インドリの悪いクセだよね」

クロさんに同意できず、咳払いをして先を促した。

「それで？」

「邪魔が入ったよ。神族の」

「なんだって」

「まあ仕方ないよね。あの子 神族にすっかり目 付けられてたし、少しでも力を使えば見付かるよね」

旅人

僕は無言で頷いた。闇で巧妙に隠れられても、神族のネットワークは伊達じゃない。僕でも逃げる時はそれにかかりきりにならなく

ては、神族から逃げ切るなんて無理なのだ。

「でもって神族もかなり警戒してたみたいだね。あつという間に消されちゃったよ」

「消された！消滅したってことか！」

「そう。インドリが全く手を出せなかつたくらい、速業だったよ」

結局彼女は神族に殺された。

闇に染まりきり自我が消えるのもいとうわず、力を使い続ける事を望んだ。それが神族に見付かる事だと分かっていたのに。

やはり神族は彼女を、ただ殺してしまった。

神族にとって世界の理を乱す存在は、あつてはならない。それを守る為に。

「でもその神族も、インドリにバツサリやられちゃったけどね」

短い前足を人間がするように組んだ黒猫は、アツサリと剣呑な事を言つてのけた。

「僕と彼女が関わりがあるから、インドリはそれを伝えてくれたのかな？」

旅人

「それもあるけど、インドリはもうすぐ動くよ。もう時が満ちたんだった。それに巻き込まれるも、自分で参加するも、去るのも月光の意味だから、先に伝えておくよ、ってさ」

「そう……」

インドリが何を考え、どう動くか。僕はおぼろ気にしかわからない。

でも根底は分かる。

僕は胸に広がった重く鈍い気分を、大きく息をすい吐き出して払った。

「わかった、と伝えてくれるかな」

「うん、いいよ」

クロさんは短く答えてから、僕の後ろで静かに座っていたナナスを一瞥して宙に消えた。

「さてと、少し時間をとってしまったね」

顔を上向かせるとどこまでも在り続けるみたいだな、深い夜の空があり、紙に指で空けた穴のような満月がそこに登っていた。

白銀の光を放つ月。夜の象徴で夜の光。

「おぬしはどうするつもりだ」

「ん？」

「インドリの意思に賛同するか。それとも」

旅人

「ナナス。僕はね、今まで自分が悔いない選択をしてきた。道は世界が決めても、その時々にある選択は僕がした。まあ、悔いが全くないとはいえないけどね」

天使を助けた事は後悔してない。天使を逃がした事も。でもやり方はどうだっただろう。

もっと違う、最善があったのではと思う。常に付きまとうどうしようもない自問自答。

それでも僕の来た道は、僕にとっては正しきものなんだと信じた  
い。

「インドリ様の起こす事に僕がどう関わるかは、世界が示すだろう  
ね」

「……つまりこのまま傍観するという事か。相変わらずだな」

「受け身なのは仕方ないよ。さて、しばらくは暢気な旅人では居られなくなるかもね？そうなる」と

立ち上がり砂をはらう。黄土色の砂はサラサラと砂漠に落ち、もう見分けはつかなくなった。

大きな流れに巻き込まれる、小さな人間のように。

ナナスも立ち上がり、ブルリと身を震って体から砂を落した。

「お主が暢気な旅人だった事があったのか？ワシは知らなかったぞ」

旅人

終り

ナナスに意地悪く混ぜっかえされ、僕は笑った。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7463b/>

---

旅人

2009年6月23日10時32分発行